
MOON-4 夜叉3（第3部完）<24>

みづき海斗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉3（第3部完） <24>

【著者名】

みづき海斗

【あらすじ】

夜叉の言葉に従い、和人の居場所を『心の田』で探そうとする裕希。

MOON - 4 夜叉 第3部完です。

5・目覚め（前書き）

第3部無事終わりましたねー。

5・目覚め

早坂はうつすらと目を開けた。

最初に視界に入ったのは、心配そうに自分を覗き込む裕希の姿。

「よかつた、早坂さん！」

少年がほつとしたように声を上げた。

「…………ってか。」

早坂はゆっくりと体をアスファルトの上に起こした。「一体、何が起こったんだ？」

後頭部をさすりながら再び裕希に視線を戻す。が、その少年の背後に、

「え！？」

『鬼』がいた。「何だ、今度は……！」

思わず腰に手をやるが、拳銃がない。

「慌てるでない。」

裕希の背後の女性……夜叉は鈴の鳴るような声で告げた。「私は帝王の命を受けて降臨したまでじゃ。」

「は？」

早坂が目を丸くする。そんな彼に右手を差し出し、

「ミエネバか。良い銃を持つておるの。」

彼の拳銃を返す夜叉。「これならば『銀』を放つ衝撃にも耐えられる。」

「裕希くん。」

夜叉から銃を受け取った早坂は、「一体、何がどうなっているんだ？」

「この人が、俺たちを助けてくれたんだ、桜と榊から。」

裕希が立ち上がり、早坂に向かって、「俺もよく判らないけど、助けてくれたんだ。」

「『闇』同士の仲たがいか？」

「そのようなものではない。」

夜叉は少し、不快感を露わにした。「私は『帝王』の命を受け『現世』に参つただけだ。」

「ねえ、夜叉。」

裕希は傍らの夜叉に視線を移し、「『帝王』つて和人の事でしょ？今、和人がどうしてるかこの新宿の結界がどうなつてるか判らない？」

「帝王は」

夜叉の唇が動く。「何処かへ参られた。それ以外は我にも判らぬ。この街の結界は」

と、一呼吸置き、

「桜が張つているもの。そして、更にその中に桜がいるべき『場所』としてもう一つ結界が張られている。」

「あの桜つて者は何者なんだ？」

早坂は夜叉を見降ろし、「同じ『闇』の者だらうへ・判らないのか？」

「判らぬ。」

夜叉は首を振った。「しかし、九桜に一番近い血を持つていてる事は確か。そうでなければこのように強い結界を張る事は出来ぬ - -

-『帝王』の様に。」

彼らの間に暫しの沈黙が流れた。空はどんどん明るさを増していく。

「情報がなさすぎるな。」

早坂が呟く。裕希は少し考え込んだ表情で、夜叉に、「ねえ、どうして夜叉は帝王と一緒にいるの？」

問いかけた。夜叉は少年を見降ろし、「それが運命故。^{きだめ}」

当然の様に答える。

「それって」

裕希は少し首を傾げ、「ちょっとおかしくない？」

「何故？」

「もし和人が本当の『帝王』だつたら、そんな『運命』なんか誰にも押しつけやしないよ。」

「・・・・・」

夜叉は長い睫毛の黒曜石の瞳を少し見開いた。

「人つてね、みんな自分で運命を作つたり変えていくんだ。」

裕希はしつかりとした口調で、「それに『闇』も『光』もない。

『一緒にいたい』って思うから側にいるんだよ。」

「何を言う。」

夜叉は戸惑つた様に言った。

「裕希くんの言う通りだよ・・・夜叉さん。」

グレーのスーツ姿の早坂も高校の制服姿の裕希に寄り添い、同意する。

「その『一緒にいたい』っていう気持ちが大切なんだ。」

「夜叉だつてずっと長い事生きてきて、側にいたいって思つた人、誰かいたでしょ。」

「『ヒト光』の子よ。」

夜叉は口元に微笑を浮かべた。「そなたは『帝王』の側にいたいと思うのかえ？『闇』を統べる吸血鬼一族の長じやぞ。」

「うん。和人が帝王でも一緒にいたい。」

強く頷き、「それに朝子さんと秀さんも。みんな俺の運命を変えるの、手伝ってくれた人だもの。」

そして、微笑む。「大切な人たちだから。」

だから、守りたい。

だから、哀しまない。

だから、闘える。

「人はね」

裕希は続けた。「僕く弱いかもしね。だからこそ一瞬の時で

も何よりも強くなれる。その力はきっと『闇』の力にも匹敵するよ。

「そうそう。」

早坂も頷く。「夜叉さんもあんまり人を甘く見ないものだね。」

「早坂殿。」

夜叉は微笑を彼に向け、「『さん』はいらぬぞえ。夜叉で良い。」

「いや・・・・・・・・」

日本人形そのものの夜叉の顔を真正面から受け止め、早坂は少し動搖し、「その・・・・・・・ま、とりあえず、そちらも『殿』はやめてください。」

髪をかき上げる。

そんな素振りに夜叉は初めて優しい笑顔を浮かべた。そして、裕希に向かい、

「人の子よ。」

「裕希でいいよ。」

「では、裕希。」

その優しい微笑のまま、「そなたなら帝王を・・・和人の居場所が判るやもしれぬ。」

「え!?」

裕希は目を丸くした。「そんな・・・俺、ただの人間だよ、『闇』の力なんてこれっぽっちもないんだから。」

「だが、聞いたであろう?和人の声を。」

「・・・・・うん。」

「大切なのだろう?守りたいのだろう?」

「うん!」

「ならば、耳を・・・心を澄ますがいい。『光』のみが持つ、澄んだ心で。」

「澄んだ心・・・・・・・・」

裕希が呟く。「・・・・・・・判るのかな?」

「出来るさ。」

傍らの早坂が裕希の肩を抱いた。「裕希くんなら絶対出来る。桜相手に、あれ程強く闘えたんだから。」

「早坂さん・・・・・・」

裕希は早坂を見上げた。その瞳が頷く。
夜明けはもうすぐ。ALTAの方向から新しい日差しが差し込んでくる。

「・・・・・」

ゆつくりと、裕希は目を閉じた。

『闇の時間』の終り。『光^{ひと}』の時間が始まる。

動き出す街。何処からか、すずめの鳴き声が聞こえてくる。夏の爽やかな風が彼らを包んでは過ぎ去つて行く。

ルルル

彼方では始発電車の発車を告げるベルの音。
街と『光』が動きだす。

その『狭間』で - - -

裕希は目を開けた。

眩しい夏の日射しがゆつくりと押し寄せる。

「わかった！」

裕希は微笑み、早坂にそう言つと、新宿大通りを西へ向かつて走り出した。

「お、おい！ 裕希くん。」

その後を慌てて早坂が追いつ。

「帝王よ」

夜叉は路上彼方に消えて行く彼らの後姿をじつと見つめ、「人はいくらでも強くなれるの。守りたいものがある限り、大切なものがある限り・・・・・帝王の申す通り満更捨てたものでもない。」

「

その口元には満足げな笑み。

一陣、早朝の風が彼女を包んだ。

刹那。

夜叉は天空へと飛翔した。

『届かぬ想いなぞないぞえ。』

そこは父親譲りの洋館だつた。

20年近く、訪れる事もなかつた。

彼女はいつも通り、朝起きるとキリマンの豆を挽き1階のリビングで飲んだ。

開けられたカーテンの向こうから、ガラス越しの夏の日射し。

「さて、と。」

長い茶色い髪を揺らし、席を立つ。そしてそのまま2階にある部屋へ向かい、ドアを開いた。

レースのカーテンがひいてあるものの、夏の日射しはそれに負けない。

彼女はベッドの横を通り、カーテンを開けガラス戸も大きく開けた。

光と風の洪水が一気に室内へ流れ込む。

「今日もいい天氣よ。」

ケミカル・ウォッシュのGパンをはいた彼女は、背後のベッドを返り見て、

「どう? 和人。こんな日は洗濯してお散歩でもしたくならない?」

女性 朝子はそう言つた。

そして、ベッドに横たわる和人へと近づく。

「和人。」

彼の名を呼び、傍らの椅子に座る。

ベッド・サイドのテーブルにはフレンチ・トーストとブラックのキリマン・・・そして朝子の『血』。

和人はその声に目覚める事はなかつた。

もう幾夜、幾朝、こんな日を迎えていたのだろう……

朝子は和人の冷たい頬に手を当て、

「今日も起きてくれないの……

哀しげに呟く。「きつと裕希くんも秀も貴方の事、心配してゐるわ

よ。」

室内を駆け抜ける早朝の風が心地よい。

和人は長い睫毛を伏せたまま眠つていた。

「和人。」

彼の額にかかる長めの髪をかき上げる。

「らしくないぞ、和人。」

その横たわる体に自分の体を託した。

「告白しといて、何やつてるのよ、貴方は。」

朝子の頬に一筋、滴が落ちる・・・

そこへ、

ピーン ポーン

玄関のチャイムが鳴つた。

「！」

朝子は振り返り、同時に眠る和人の枕の下からジャック・ナイフを取り出した。

（桜は結界を自由に入りできる。）

ここは都心より少し離れた住宅街。今はもう陽^ひが出て夜ほど警戒する必要はないのだが・・・・・

相手が桜ならそれをやつてみせるだろう。

朝子はずつとナイフを構えたまま、和人の側にいた。

もし、自分が彼の側を離れた途端『襲われたら』と思つと。

ピーン ポーン

2度目　のチャイムが鳴る。

朝子はその部屋の片隅にあるインター　ホンへ近寄り、
「誰。」

目を細め問い合わせた。

「朝子さん！？」

彼女の耳に飛び込んできたのは、3か月前に別れた裕希の元気な
声だった。

「裕希くん！？」

朝子は目を見開いた。

裕希は今は成城の家にいるはず・・・
「どうも、早坂です。新宿中央警察署の者です。」
続いて知らない男性の声。

朝子は一瞬、戸惑つた。それを背後から押したのは、
「案ずるでない。帝王は我が見ている故。」

聞いた事もない女性の声だった。

振り返ると、見たこともない黒に銀色の刺繡を施した和服姿の長
身の女性だった。

腰まである見事な黒髪。

「行くがよい。」

彼女は朝子にそう言つた。

「・・・・・はい。」

朝子は彼女の存在に戸惑いながら、

バタン

一度だけドアの前で背後を振り返り、玄関へと向かつた。

ガチャ

金色のドア・ノブをひねって木製の重いドアを開ける。

「朝子さんっ！」

真っ先に飛び込んだのは、裕希のあの笑顔。

「裕希くん・・・・・・？」

朝子は自分の目を疑つた。少し痩せたものの身長はいつの間にか、朝子と並ぶ位になっていた。

そんな裕希が今、目の前にいる。

「裕希くん！」

朝子は裕希を抱きしめ、涙を流した。「本当に裕希くんなのね、本当に、本当に！」

嬉しさと『あの日々』の懐かしさが彼女の胸の中に甦る。彼を抱きしめ、朝子は、

「ごめんね、裕希くんあの時はつらい思いさせちゃって。」

弟の様に強く抱きしめる。「本当、大人になったのね、全然前と違うわ。」

「判つてるよ、朝子さん。俺が巻き込まれる事、させたくなかつたんでしょ？」

「うん。」

「感動の『対面申し訳ないんですけど』

早坂が胸から警察手帳を取り出し、「新宿中央警察署の早坂 充 刑事です。」

「あら。」

朝子は涙をふき、「どうしちゃったの、裕希くん。警察の人なんて。」

「俺のS.Pだよ、早坂さんは。」

裕希はにっこり笑つて言つた。「全部・・・和人の事も秀さんの事も『闇』と『光』との事も知ってるから。」

「報告書が書けない状態です。」

髪をかき上げながら早坂がぼそりと言つ。

「でも、どうしてここが？」

改めて、裕希を見つめる朝子。

「和人が呼んだから。」

裕希は朝子をじっと見つめ、「和人の呼ぶ声が聞こえたから」と

に来れたんだ。和人は何処？」

「・・・・・」

その問いかけに朝子の表情が暗くなる。

「それが」

朝子は切なげに呟いた。「あれから目を覚ましてくれないの。」

「・・・・・ そうなの・・・・・」

それを予期していたかの様に、寂しげに裕希は呟いた。

「とりあえず」

早坂は、「不破和人の居る所へ連れてつてくれませんかね。裕希くんは和人の『記憶』を『共有』しているらしい。」

そして、「もしかしたら、和人を目覚めさせる事が出来るかもしない。」

「本当!? 早坂さん。」

裕希は早坂に視線を移し、「・・・・・ そうだよねー俺、何か出来るかもしない。」

「裕希くん。」

朝子の表情が明るくなる。「和人なら2階よ、行きましょう。」

バタンッ

裕希は勢い良くそのドアを開いた。

室内は明るい日差しで満ちている - -

その壁際に添えつけられたベッドで彼は眠っていた。

「・・・・・ 和人。」

裕希はゆっくりと彼に近づいた。そして、その頬に手を伸ばす。

「起きてよ、和人。」

裕希は囁いた。

「どう？ 裕希くん。」

後から駆け付けた朝子が彼に声をかける。

「・・・・・」

裕希は無言で和人の顔を見つめていた。

「裕希くん・・・・・」

その光景に早坂が声をかける。「思いつかないかい？ 彼を目覚めさせる方法。」

「・・・・・」

裕希は無言のまま、和人の傍らでじっと彼の顔を見つめていた。

「・・・・・ 判らない。」

一言、右手は彼の頬に触れたまま。
沈黙が室内を支配した時。

「届かぬ想いなどないぞえ。」

何処からか女性の声が聞こえてきた。
振り返ると、入口に夜叉が立っていた。

「夜叉！」

「さつきの・・・・・・」

裕希と朝子は同時に声を発した。

そんな2人に夜叉は微笑を浮かべただけで、滑る様に中に入り、ベッドの裕希の隣に立つた。

まるでその位置が当然かの様な自然さで。

「夜叉。」

裕希は半分泣きそうな声で、「俺、やっぱ判らない。和人の名前を呼ぶことしか思いつかない。血は朝子さんじゃないとあげられないし。」

「そなたは」

夜叉は目を細め、

「桜と鬪えるかえ？」

問いかけた。

「うん、闘う！」

裕希は力強く答えた。「のために、俺、新宿に戻つて来たんだから。」

「『闘』との闘いだぞ。覚悟は出来ているかえ？」

「出来るさ。」

裕希は夜叉の目をじっと見つめ、「大切な人や守りたい人がいるから、俺は闘える。結果がどうであろうと。」

一呼吸置き、「秀さんも桜から取り戻してみせる。」

「……………そうか。」

夜叉は裕希を見降ろし言つた。それから、

「朝子殿。」

と、右手を差し出し、「そのナイフを貸してはくれないか？」

「え。」

チャイムが鳴った時から持っていた、父の形見のジャック・ナイフ。

朝子は少し戸惑つた。

「まあ。」

促す夜叉に、朝子はそつとナイフを渡した。

「十分じゃ。」

よく手入れの行き届いたそれを眼前にかざし、

「どうするの？夜叉。」

そう問い合わせる裕希の目の前で夜叉は左手首をそのナイフで切つた。

スツ・・・・・・

「何するの！」

「夜叉さん！」

裕希と早坂が思わず叫ぶ。

「案ずるでない。」

夜叉は妖しい笑みを浮かべ、その自分の血をじっと見つめていた。

滴が、白いベッド・シャツを朱に染める・・・・・

「・・・・・夜叉。」

そんな彼女を見つめ、裕希は、「そんな事したら夜叉が死んじゃうよ。」

夜叉の左手首から落ちる血は、和人の唇に向かつて落ちていた。彼らはそんな夜叉の様子を見守るしかなかった。

「・・・・・今。」

朝子が口を開いた。「救急箱、持つてくるから。」開かれたままのドアへ身を翻す朝子。

そこに。

「大丈夫だよ、朝子。」

一人の青年のよく透る声がした。

テラスへと続く白いカーテンが夏の風に大きく揺れる。

「・・・・・」

裕希は視線を夜叉から和人へと戻した。

手が。

暖かい手が裕希の頬に触れた。

「・・・・・」

目の前には、翡翠色の瞳・・・・・自分をいつでも見守つてくれていたあの忘れられない懐かしい瞳。

「裕希。」

和人は言った。「背、伸びたな。」

「和人・・・・・」

夢かと思った。

何度も同じ夢を成城の自宅で見た。だから・・・・これも『夢』の続きかと思つてすぐには信じる事が出来なかつた。

「和人！」

朝子が背後で叫ぶ。

「不破和人。」

早坂もその名を口にする。

和人は裕希をじっと見つめたまま、室内の光の明るさに目を細めた。

「夜叉。」

和人は裕希の傍らの女性に声をかけた。

「承知。」

すつ・・・・・と、裕希の後ろを通りカーテンを少し閉める。

「本当に」

裕希は咳いた。「本当に和人なの?」

「そうだよ。」

和人は微笑した・・・・・・その見る者全てを魅了する笑みで。時が - - - 止まる。

「ごめんね、裕希。」

和人の優しい声。「一人にして。」

“君の中で時を刻むR h i s m
いつか消える日まで響き合つようにな
愛しさずっと零れおちないで
輝いて欲しい・・・・・
闇の中で彷徨う陽炎“

裕希の中で時間が動き出した。

「和人！」

カーテンの隙間から入る夏の日射しが彼らを取り囲んでいた。

『届かぬ想いなどないぞえ。』

「来たわ、和人。」

「来たようだね、和人。」

新宿の結界の中にある桜の屋敷で。

うたたねから目を覚ました桜は、幼い少女の声と大人びた青年の声を混ぜ合わせた様な口調で言った。

藤椅子にドレス姿で座つたまま、背後に近づいて来た榊と秀に、

「『今度こそ』負けはしない。」

「もうすぐ『帝王』と決戦よ。」

一つの入り混じった声。

「・・・・・」

榊と秀は一つの『人格』が入り混じる桜を見守るしかなかつた。

再び。

夜が『闇』が始まる桜の予言に。

『一度見たら忘れやしませんよ、あの瞳。』

A · B · S ·

↙ 3 F · i · □ B · G · M ·

5・自覚め（後書き）

次、何書こう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2239n/>

MOON-4 夜叉3（第3部完） <24>

2010年10月22日00時59分発行